よこはまの
地区社協全体会
2021-2022

主　催：　横浜市社会福祉協議会

共　催：　18区社会福祉協議会

ほら、
よこはま は
あったかい

所要時間	プログラム	ページ
3分30秒	◆オープニング動画	
20分	講演 『生活状況の変化による新しい困りごとに対して地区社協だからこそできること』 渡辺 裕一 氏（武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 教授）	1～8
20分	地区社協実践例の報告① **旭区 万騎が原地区社会福祉協議会** 「お互いさまの気持ち 繋がる支援イベント」 石原 泉 氏 （万騎が原地区社会福祉協議会 会長） 菊池 南欧子 氏（万騎が原地区社会福祉協議会 事務局長） 講師よりコメント（5分）	9～17
20分	地区社協実践例の報告② **神奈川区 神北地区社会福祉協議会** 「神奈川区神北地区ふれあい活動」 牧田 健一 氏（神北地区社会福祉協議会 会長） 友井 惠子 氏（神北地区社会福祉協議会 副会長・ 神北地区民生委員児童委員協議会 会長） 松山 登志子氏（神北地区社会福祉協議会 事務局長） 柄本 惠子 氏（神北地区社会福祉協議会 会計） 山本 厚子 氏（神北地区ふれあい活動 まとめ役） 講師よりコメント（5分）	18～27
5分	まとめ 渡辺 裕一 氏（武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 教授）	
5分	おわりに 池田 誠司（横浜市社会福祉協議会 地域活動部 部長）	

合計 **73分30秒**

生活状況の変化による新しい困りごとに対して地区社協だからこそできること

令和3年度地区社協全体会
渡辺裕一（武蔵野大学）

コロナ禍がもたらしたもの

- 差し迫る命の危機と予期せぬ別れ
- 目に見えない恐怖
- 情報の氾濫と疑心暗鬼

「今まで通り」が通じない、新しい生活

つながりの分断

- 家族のつながりの分断
- 友だちのつながりの分断
- 職場のつながりの分断
- お茶のみ仲間の分断

「集まれ」から「集まるな」
「つながれ」から「つながるな」

深刻化する孤立・孤独

人の意見や考え方の分断

- ワクチンを打つのか、打たないのか。
- サロンを開催するのか、しないのか。
- 配食サービスをするのか、しないのか。
- どの情報を信じるのか、信じないのか。

お互いの違いを認め合えない社会

「違い」による差別や偏見と排除

「自分らしさ」の喪失

- 楽しいことは失われた。
- 生きる意味を見失った。
- 仕事も失った。
- 新しい自分らしさは見つからない。

この時代をどう生きるべきか

生きづらさの拡大

地区社協の手引き（はじめに）

- 活動は変化しても「誰もが安心して自分らしく暮らせる地域社会をみんなでつくりだす」という目的は今も昔も変わりません。
- 地区社協の原点である「一人ひとりの困りごとを解決できる地域づくり」という目的を再確認する・・

コロナ禍で、活動は変わっても、
原点は変わらない

地区社協の強み（地区社協の手引きP.9・10）

- 誰もが参加できる話し合いの場を作ることができる。
- 公共性の高いネットワークと資金力に裏付けられている。
- 「放っておけない」という人の集まる誰も排除しない任意団体。
- 地区社協は、地域に根ざし、原則、5年後・10年後も解散しない。

原点が変わらなければ、地域における地区社協の価値は変わらない。

地区社協だからできることがある

- 今こそ、原点を見つめ直すとき。
- 原点にこそ、地区社協だからできることがある。

「誰もが参加できる」話し合いの場を取り戻す

「誰もが参加できる」話し合いの場

- 集まるだけではない、「声をあげる」場を作る。
- 「誰もが参加」するためには、様々な方法でつながる必要がある。
- 電話、手紙、訪問、集合、SNS、LINE、zoom・・・

多様な人々の声に耳を傾け、自分の地域で何が起きているのか知る手がかりにする。

高齢の人は、テクノロジーが使えないんだ

- 使わなければならなくなると、「困った」の声が聞こえてくる。
- ワクチン接種の予約は誰がしてくれたの？孫？家族？孫や家族がいない人は？
- 「使えない」という声に寄り添う方法は、「使わない」という選択肢ではない。
- では、どうやって使うのか？使えるようになるのか？
- 「人に迷惑をかけてはいけない」を乗り越える。

地区社協は、一人ひとりの困りごとを解決する。

みんなで使えるようになろう！

- テクノロジーの活用をサポートしてくれる人たちを見つける。
- 「孫」のような人たちのグループとつながって、教えてもらえる人とつなげる。
- 得意な人、テクノロジーを使える人を見つける（必ずいる）。
- 「使うな」と言うのではなく、「使えるようになる仕組みを作れ（作ろう）」と訴える。

地区社協のネットワークを最大限に活用する

使わない（使えない）人も排除しない！

- 使わない（使えない）という声にも耳を傾けていく。
- 使うのが怖い、危ないという人もいる。
- テクノロジーは万能ではない。

今までのつながり方（主に集合形式）も万能ではなかったことに気づいた。

自分の地域でどんな困りごとが発生しているのか知る。

- コロナ禍においても「誰もが参加できる」話し合いの場を作る努力は、「新しい生活」の中で発生している困りごとを知ることになる。
- この「新しい生活」の中で発生している困りごとに耳を傾け、多様な困りごとに柔軟に向き合う組織・団体は、「地区社協」以外にはない。

地区社協だからこそできることは、活動が違っても、「今まで通り」でも、「新しい生活」でも同じ。

活動していたら、いつの間にか解決している。

- 深刻化する孤立・孤独
- 「違い」による差別や偏見と排除
- 生きづらさの拡大

コロナ禍の前からの問題も解決している。

地区社協に期待すること

- 今だからこそ、本当に「誰もが参加できる話し合いの場」を作る。
- 今だからこそ、「一人ひとりの困りごとを解決」する。
- 今だからこそ、ネットワークを拡大する。
- 今だからこそ、誰も排除しない。

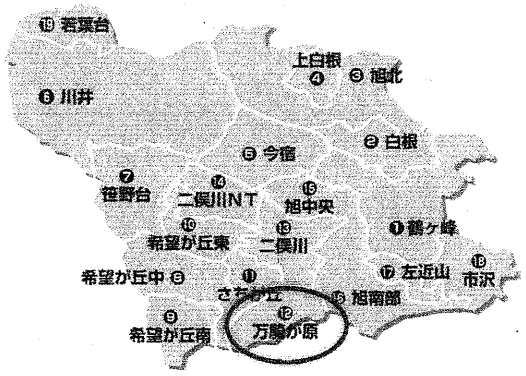
地区社協の原点に基づく活動を続けること

ありがとうございました。

事例発表

①旭区　万騎が原地区社会福祉協議会

万騎が原地区の概要



万騎が原地区は、帷子川の支流である二俣川の南側丘陵地を昭和30～40年代にかけて開発された、戸建て住宅を主体とした住宅地です。

昭和50年代には、相鉄いずみ野線開通により南万騎が原駅周辺も住宅地となりました。近年は、高齢化に伴う住替え等があり、子育て世代の転入世帯が増えています。

世帯数：約2,800

単位自治会数：18

お互いさまの気持ち

繋がる支援イベント

支援イベントの開催のきっかけ

新型コロナウィルス感染症拡大による緊急事態宣言を受けて、
生活が苦しくなっている世帯の方が増加しています。
旭区社会福祉協議会が、2020年12月に『ひとり親世帯向け旭区産野菜の無料頒布会』を実施したことを知り、
地区社協でも何か手伝えることはないか？と考え、相談しました。
そして、手伝いではなく、私たち自身で、私たちの町で、生活困窮者向けの食品・日用品の無料頒布および生活相談会を開催できることになりました。

実施までの経過

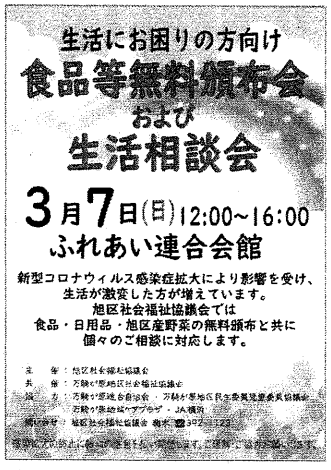
1/ 6 何か手伝えることはないか？と、区社協に申し入れ
「区社協と地区社協でやりましょう」との提案を受ける。
その日のうちに内容・目的等打ち合わせをし、開催日が3/7に決定

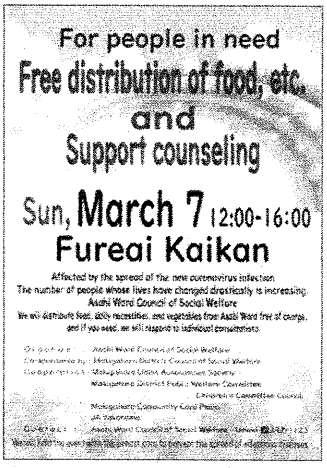
1/ 7 チラシの素案が完成

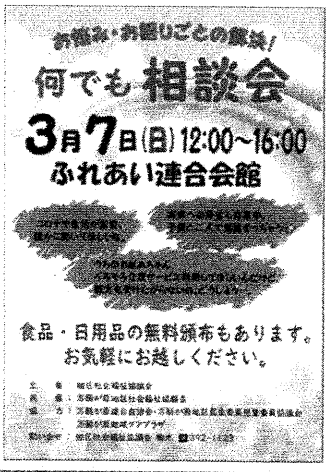
1/13 ふれあい会館にて打ち合わせ
（地区社協役員・事務局・青指・ケアプラザ・おたのしみ給食会）
開催の意義・目的　チラシのデザイン　会場の設営案　物品提供について 等

3/ 6 前日準備

チラシ 採用と不採用







×

PRの方法

- チラシ（開催告知用・頒布物品募集用の2種）
  自治会での回覧・掲示　民児協による呼びかけ
  旭区社協による個々へのお知らせ　他地区での回覧・掲示
- 地区社協ホームページ
- タウンニュース
- YCV じもっと
- 地区社協Facebook
- 地区社協Twitter

開催の意義

来場者の人数は重要ではなく
チラシの回覧・掲示をし、地区内で支援イベントを行うことで
「地元でも応援してくれる人がいる」「身近に相談できる場がある」
ということを知ってもらい、生活困窮者の孤立を防ぐ。
また、支援を必要としている方々が居ることを
幅広く認識し、関心を持ってもらう。

開催を知った人たちの反応 ①

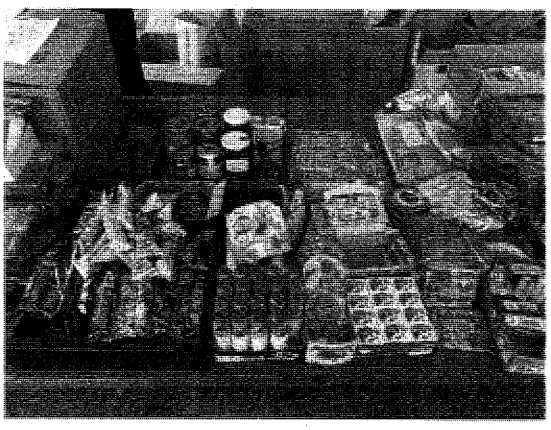
- 「生活にお困りの方」を自治会は把握していない。
  どうやって知らせるのか?という自治会関係者の疑問があるかも。
- 「生活に困っている」というのに私は該当しますか? という質問に
  どう答えるか考えているのか?
- 「無料頒布会」と聞いて、困窮者でない人が来たらどうする?
- そもそも万騎が原地区に困窮者がいるのか?

開催を知った人たちの反応 ②

- 物品は多くの方が提供してくれた。買って寄付してくださる方もいた。
- 「お困りの方に自分も何かしなければと感じていたが、何をしていいか
  わからなかった。こういうイベントを企画してくれてありがとう」と言われた。
- 近隣地区も回覧・掲示してくれたことで、「掲示板を見て来ました」という
  方が数人いた。掲示板の効果は大きいと感じた。
- 食料品に限定せずに寄付を求めたのがよかった。多岐に渡る頒布品が
  揃い、必要なものを自分で選んでもらうことができた。

当日の様子

当日の様子



私たちの根底にあったもの

「おもてなし」の心

看板や寄せ書き用ボードなど、印刷ではなく手作りにこだわり
来場者の方々が少しでもホッとし、笑顔になれるよう心掛けました。
また、遠慮してご自分からは手を出しにくいような方には
こちらから声掛けをし、普通のイベントのようにしました。

手作りの看板

手作りの寄せ書きボード

活動の効果

- 受支援者と支援者のつながり

  生活相談および来場者へのアンケートは区社協が担当。

  イベント終了後も希望者には民生委員や区社協との繋がりができている。

- 地区社協同士のつながり

  以前はお互いの事業に深い関心はなかったが、それぞれの支援イベントをPRし合ったり寄付をし合ったりしている。

- 区社協と地区住協のつながり

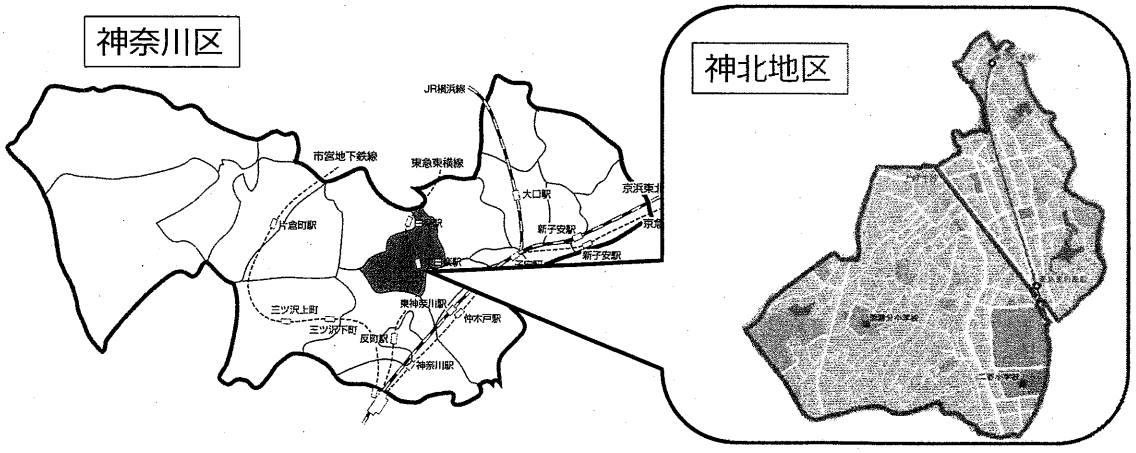
  今までも様々なことを相談していたが、それぞれ特性を活かし、相互協力と信頼関係が強くなってきているように感じる。

課題と今後の展望

- ネット検索しなくても直接目に触れる掲示板は、とても有効。
- 一方、TwitterによるPRでは、支援イベントの告知は、物品募集の倍以上の速さで閲覧数が伸びる。
  様々なツールを使って丁寧にPRすることが望ましい。
- 地区社協が何か困りごとを直接訴えられることはほとんどないが
  そのきっかけを作ることはできると感じた。そのためにできることを考え続けていく。

神奈川区神北地区の特徴①

横浜市神奈川区の中央に位置し、地区内南北に東急東横線が走っています。
また、幹線道路　上麻生線がほぼ中央に通っており、
上麻生線の両側は主に住宅街となっています。10町内会で構成されています。



神奈川区神北地区の特徴②

＜神北地区の人口＞

総人口	11,208人
65歳以上	2,520人 （22.5%）

＜神北地区の世帯数＞

総世帯数	6,542世帯
６５歳以上 ひとり暮らし世帯	913世帯 （14.0%）

神奈川区神北地区の特徴③

10年ぐらい前までは葬儀があると近所同士で手伝うのが当たり前の地域だった。

それが５年ほど前から亡くなって数ヶ月経ってから連絡が来る。

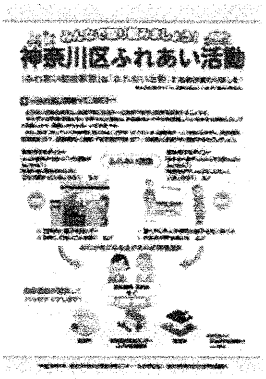
見守ることが難しくなっていると感じる。

神奈川区神北地区の特徴④

見守りは75歳以上の高齢者だけではなく、
60~70代前半の人でも見守りの必要がある。
そんな人が増えてきたと感じている。

『ふれあい活動』ってどんな活動ですか？①

・地域で気になる方への訪問や見守り活動を「ふれあい活動」と呼んでいます。
・見守り活動に協力する地域の皆さんのことを「ふれあい活動員」と呼んでいます。
・日常生活の中で、「ちょっと気になる」「ちょっと心配」という方を対象に見守りを行っています。



神奈川区ふれあい活動のリーフレット

『ふれあい活動』ってどんな活動ですか？②

・ふれあい活動員は地域の中の見守りを行っている民生委員・児童委員さんやシニアクラブの友愛活動員などの見守り活動の担い手同士で、見守り活動で気付いたことを共有しています。

・神奈川区では地区全体の情報交換の場づくりや、見守りの研修の場を作る役割を担っています。

神北地区ふれあい活動代表者研修
＜地区社協主催＞

神北地区の『ふれあい活動』①

神北地区のふれあい活動員の人数は…１１２人

・若い世代の方にも声をかけ、担い手を増やしています。

若いふれあい活動員の方から、子ども関係の情報をもらっています

各ふれあい活動員の皆さんは、日常生活の中で、
気になった人や、気になる世帯があると、民生委員へ連絡をします。
それを受けた民生委員は、地域ケアプラザ等に相談をし、
一緒に気になる方の訪問などをしています。

神北地区での『ふれあい活動』②

○単位町内会圏域での取り組み
・町内別懇談会　＜年２回＞
　町会ごとに、ふれあい活動員を集めた情報交換会を実施
　町内会長・保健活動推進員なども参加
・地域カフェ
　地区内に地域カフェがあり、
日頃の見守りの情報交換の場になっている

地区社協を通じて、
民生委員が各町内会ごとに開催

○地区社協での取り組み
・ふれあい活動全体研修＜年１回＞
　地区全体のふれあい活動員に向けて研修会を実施。
　令和３年度は障がい理解について

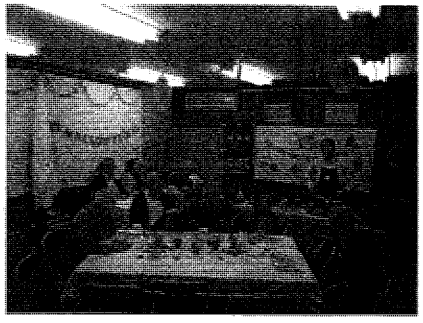
・ふれあい活動　代表者研修会＜年１回＞
　各町内会ごとふれあい活動員が２名ずつ参加し、
　町会を超えた意見交換や事例共有を実施。

地区社協が主催・とりまとめ

神北地区での『ふれあい活動』③

◆日常の見守り・情報交換の場
　地域カフェ・・・年代問わず、誰もが参加できる地域の居場所のこと。
　　現在地区内に４か所あり、毎月１回開催。
　　地区内で開催日が重ならないようになっています。

ケアプラザ圏域で作成した地域カフェマップ



カフェ3110/（さいとうぶん）の様子

見守りの中の１事例を紹介します①

＜発覚までの経緯＞

区役所福祉保健課から、ごみ屋敷として民生委員に連絡が入った。

＜基本情報＞

Sさん　７５歳、単身世帯　男性。自宅は木造２階建て。
以前は母と二人暮らしだったが、母が他界してから独居となり、
家がだんだんとごみ屋敷状態に。悪臭で町内会に苦情も来ていた。
電気はつくが、水道はつかない。ゴミが多く、家への出入りは窓からしていた。

見守りの中の１事例を紹介します②

○Sさんの相談を受けて、ふれあい活動の見守りを開始

○Sさんへの関わり方の工夫

・そこで、Sさんの亡き母の友人から声をかけることで、
Sさんとの関係を築くきっかけとなった。

Sさんとの関わりの経緯

○ごみの搬出

・家の内外を片づけ終わるまで１年間

・Sさんに相談をし、７人のふれあい活動員でゴミ収集の日に

・１日２袋ずつゴミ袋を集積所に出すことになった。

Sさんの変化と周りの変化

○Sさんの変化

・ふれあい活動員と地域ケアプラザでカンファレンスを開催

○Sさんに関わる人々

・専門職に繋がり、色々な支援が始まった。

ケアプラザ：地域全般　　訪問看護：認知症やアルコール依存関係

弁護士：財務管理　　デイサービス：入浴

・毎日誰かがSさんの状況を見に行っている状態。

現在のSさんは・・・

○現在のSさんの生活

トイレが使えるようになった。

近隣の方が塀の修繕をしてくれて、家の中が片付き、

自宅の中に自分の居場所ができた。

○ふれあい活動員のゆるやかな見守りも継続中

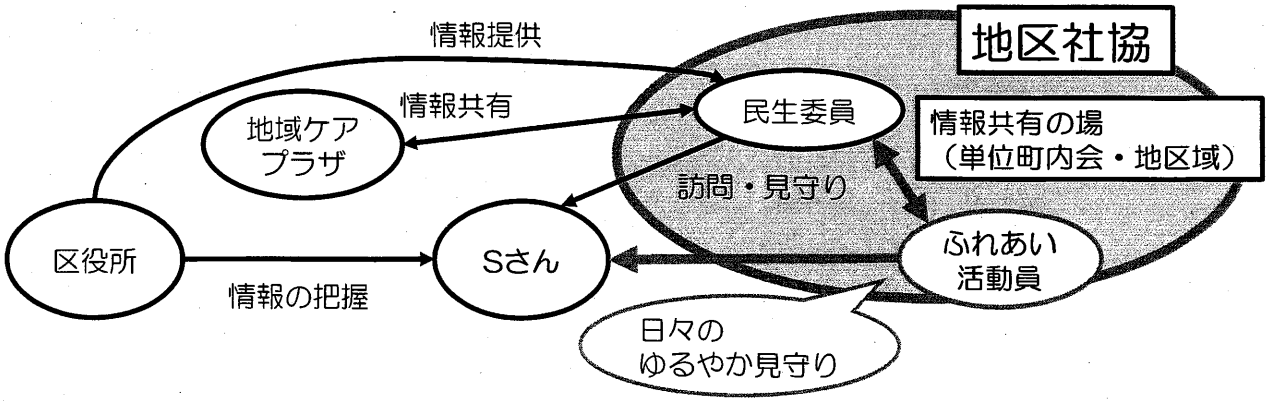
声をかけると、あいてるよと顔を見せてくれる。

Sさんに関わった人の連携について

- いろいろな人がつながる場＝**地区社協**

今回のSさんの場合は、

区役所・民生委員・ふれあい活動員・地域ケアプラザの連携があった。

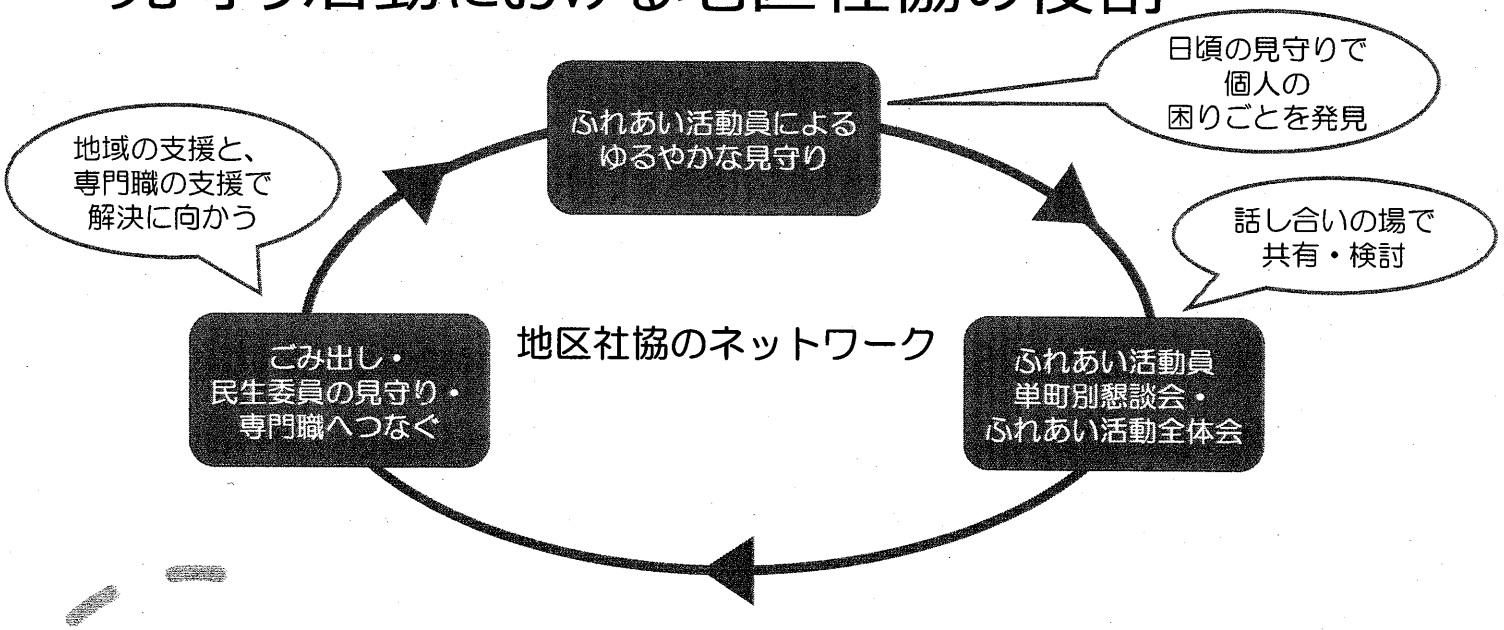


見守り活動における話し合いの場の大切さ

・地区社協＝様々な団体で構成されたネットワーク組織
　⇒多くの人が関わる**“話し合いの場”**を作ることができる。

・個人の困りごとをいろんな人が関わる、話し合いの場があると、
　いろいろな立場の人が集まって検討ができる。
　⇒地域での助け合いや専門職の支援につながる。

見守り活動における地区社協の役割



ご清聴ありがとうございました。